

# ほっと通信



ひと雨ごとに秋が深まり、澄みわたる空に紅葉が映える季節となりました。早いもので2学期も半分が過ぎ、就学時健診や学校選びなど、先生方や保護者の皆さんも新年度に目を向け始める時期となりました。

そこで今回のほっと通信では、新入生を迎えるにあたっての市内小学校・中学校での取り組みをご紹介します。

## 就学時健康診断の時期に

「ご家庭でお子さんを育ててきている中で何か困ったことはありませんか？」

「保育園や幼稚園で友達と一緒に遊んだり、毎日を過ごしたりしている中で、気になることはありませんか？」

「一緒に考えませんか？」

小学校では保護者にこんな問いかけをしています。



小学校では、入学を半年後に控えている子供たちが新たに始まる学校生活の中で困らないようにしていきたいと考え、もっと気軽に就学に関する相談をして欲しいと思っています。

しかし、保護者にとって、相談をすることは、「我が子に何か障害があるのではないか」という不安やおそれを感じるものであり、それ故、躊躇してしまうこともよく分かります。

また、保育園や幼稚園では、小学校に気になる子供の様子を伝えるとよくない先入観を与えてしまい、色眼鏡で見られてしまうのではないかとこのことを心配して、あえて伝えないということもあるのではないのでしょうか。

学校で行う相談は、その子供にとって「得意なところはどんなことか」「苦手なところはどんなところか」ということを考えたり、そのための支援の方法を探ったりするためにあります。その子供にとって苦手なことを大人が理解せず、間違った指導を続けてしまえば、その子供の自信はどんどんなくなり、自分のことを大切に思う気持ち(自己肯定感)が少なくなってしまいます。それが積み重なると得意なことまでも「自分はだめなんだ」と思うことでだんだんに不得意になってしまいますし、意欲が少なくなったり、乱暴になったりしてしまうこともあります。いいことは一つもありません。

ですから、小学校に入学してからではなく、気になることがあれば就学前から何らかの支援をしていく必要があります。早ければ早いほど子供が困らず過ごすことができるようになります。

そのためには、小学校では就学時健康診断が終わったらできるだけ早く保育園や幼稚園と連絡をとるようにしたいものです。就学支援シートの利用者も増えています。保育園や幼稚園では、従来どお

り積極的に保護者にアドバイスをしたり、就学に関して相談を勧めたりしていただくことをお願いしたいと思います。そうすることで半年後に小学校に入学した後も子供が安心して学校生活を送ることができるようになるのです。

就学時健康診断の時期となりました。子供の成長にかかわる機関が連携を密に取り合い、一貫した指導を継続していくようにしていきましょう。



中野北小学校 副校長 山崎尚史 先生

## 特別支援教育を展開しながら思うこと



本中学校では、特別支援教育が開始された平成 19 年に市の研究協力校を受け、「特別支援教育における組織的な支援システムの在り方」をテーマに、教師のアセスメント力の充実、連携した校内の支援体制の構築、支援教育の日常実践化、を求め 2 年間の研究を行いました。

その成果として、校内の発達障害の理解力や対応力は以前と比べ、教員によって多少の温度差はありますが、とても充実してきたと感じています。…そして、今、様々に思うことは…

特別支援が必要な生徒が多く、重症度が増してきたと感じます

本校で、特別支援教育の対象として対応する生徒は約 35 人です。300 人規模の学校として約 11% です。対象生徒の特質も課題もそれぞれで、その困難さもパニックや不登校、対人トラブル、学習困難など様々です。中学校ですので、発達障害を抱えての思春期の困難さも感じますし、二次障害も見えてきて、重症度が増してきたと感じています。

連日、複数の事例が同時進行で、対応を迫られる問題が発生します。対応する教師は瞬時に対応の優先順位の判断や対応方法などの選択を迫られます。授業を進めるか、探したり居場所や状態を確認したり、直に対象生徒を指導するか、学級を指導するか、どんな方法でどこまで指導するか、教師一人ひとりの力量が日々試されていると感じています。



頼りは校内連携の力でつながり、支えあうこと

こんな校内状況を切り開く鍵は、教師個人の力量を磨くこと、互いに連携して、対応スキルを伝え合うこと、互いに支え合うことがとても重要です。幸い、本校では 2 年間の研究のプロセスで、『みんなで取り組む。みんなで繋がる。』という校内の思いが培われたと感じています。教師それぞれの特別支援教育についてのとらえ方や課題は、一致しているとは言えないことも多々ありますが、『みんなで取り組む。みんなで繋がる。』という思いを、互いの支えに頑張るしかないという思いです。

支援方法の工夫を努力したら、成果も見えてきた

校内の支援システムとして、特質に合わせた指導(クールダウン指導・セルフモニタリング指導・校内の基準枠組)などを徹底して行い、個別学習支援(別室での授業) 授業の工夫 通級指導の四本柱で実施しています。校内の指導として統一性がとれたシステムで機能しているので、学年やクラスによっての指導の差異も少なく(本人の状態などによっての差異はありますが) 教師同士がつながる良さを感じながらの対応は、目の状況は大変だけど、どこか頑張れる状況を生み出していると思います。コーディネーターとして校内全体を動かし、別室登校 6 名・別室授業 7 名の対応を本人や保護者を包括して構築することは、なかなか辛いものがあります。

しかし、この二年半で出てきた子どもの変化(別室での授業でパニックが消滅。友達ができる。関係をつくる努力をはじめ。学校を楽しむ・学習が積み上がる・自発性・何があっても校内が安定など)を目の当たりにすると、教育の現場にいる楽しみを噛みしめたりするのです。

校内の連携が動くようになって、近隣小学校との連携も開始する

こんな風に、生徒一人ひとりの特質を見立て、指導の成果も見えてくると、子どもの成長とともに、各発達段階における必要な対応も見えてきます。例えば、クールダウン指導で、小学校で、教室の出入りやパニックに至る自覚・教室復帰のルールなどを小学生のレベルでいいから身につけておけば、中学校では少しレベルを上げたソーシャルスキルに向け指導がし易いし、本人も苦労しないだろうと予想するのです。

そこで、私は、近隣の小学校2校に呼びかけ、各校の校長の賛成を得て、3校で協議をするための特別支援連絡会を平成21年度から発足させました。構成員はコーディネーターを中心に、校長・副校長・養護教諭・通級担任・希望する担任にも呼びかけ、ソフトで率直な意見交換をするつもりで毎学期の開催です。

最近、小学校で通級に通う子をもつ保護者から、「来年入学ですが・・・」と相談を受けました。私は「連絡会もあるので、よろしければ小学校の様子を伺って、入学後の対応の準備もできますが。」とお答えすると、保護者は実名を告げられ「保護者に必要なことがあれば努力します。ご連絡ください。」とおっしゃいました。

校内の連携で教師や保護者がつながり、その上に、学校同士もつながれば、特別支援の子どもにとって、成長する環境がほんの少しでも良くなるのかなと考えるこの頃です。



市内中学校 特別支援教育コーディネーター

## キーワード

## 『チャレンジスクール』



チャレンジスクールとは

小・中学校での不登校や高校での中途退学を経験した生徒など、これまで能力や適性を十分に生かしきれなかった生徒が自分の目標を見つけ、それに向かってチャレンジする学校

チャレンジスクールの特徴

- ・ 自分のペースに合わせて各時間帯（部）を選んで入学する、3部制の定時制単位制総合学科高校
- ・ 学力検査や中学校からの調査書によらず、生徒の学習意欲を重視して入学者選抜を行う
- ・ 少人数のきめ細かい指導を通して、基礎的・基本的な学力の定着を図る
- ・ 総合学科の特性を生かし、職業系を含めいろいろな専門科目を設置
- ・ ボランティア活動などの体験的な活動を通じて、豊かな人間性を育成
- ・ カウンセリングや教育相談の充実など、心のケアに配慮したきめ細かな指導を行う
- ・ 社会生活のルールやマナー、言葉遣いに関する学習を行い、コミュニケーション能力や社会性を育む

すでに開設している学校《八王子拓真高校は、チャレンジ枠を設けた普通科高校です。》

- ・ 桐ヶ丘高校（北区） ・ 世田谷泉高校（世田谷区） ・ 大江戸高校（江東区）
- ・ 六本木高校（港区） ・ 稔ヶ丘高校（中野区） ・ 八王子拓真高校（八王子市）



なかには特別支援教育の対象となる子どもも入学し、心理的・教育的なサポートを受けることで安定した、学校適応が好転し登校・学習の定着が図れた・・・などの声もあるようです。一人ひとりに合った進路を見つけ、子どもたちが未来に希望をもてるよう願っています。

ぽけっと

『“こだわり”って?』



「この子はこだわりが強いんです」「こだわりがあるから発達障害だと思う」ということばを耳にすることがあります。確かに発達障害の子どもの中にはこだわりをもつ子も多くいますが、こだわりがある＝発達障害ということではありません。

私たち大人でも「ペットボトルのお茶なら」「車は絶対のものしか買わない」などちょっとしたこだわりはたくさんあると思います。こだわりはその人らしさを形成するひとつの要素でもあり、思いやエネルギーを傾ける対象ともいえます。

ではなぜ子どもの「こだわり」は問題視されやすいのでしょうか。子どものこだわりの例として「ポケモンの絵ばかり描く」「同じ手順に執着する」「虫や電車が大好きでとても詳しい」…などがあり対象も程度も様々です。おそらくどんな子どもにも多少なりともこだわりはあるものの、それが度を越えてしまったときや場面に合っていないときに“困ったこだわり”という風に周囲に認識されるのではないかと思います。

ところが、発達障害のある子どもの中には見通しが立たない不安な状況のときほどこだわり行動が起きやすかったり、自分の行動が場面に合っていないことに自分では気づきにくかったりすることも多くあります。子どもがこだわり行動を起こしているときには、その前後の流れや本人の心境などにも目を向けてみると新たな発見があるかもしれません。

こだわりを減らすことが大事な場面もあるかと思いますが、より好ましい行動を増やすこともその子が生きていく力となると考えられます。こだわりを傾ける子どものエネルギーを活かしつつ、様々な行動・スキルを身につけられるようサポートしていきたいですね。



(文責：心理士 渡瀬 恵)

## 巡回相談のご案内

特別支援センターの心理士・研究主事などが、授業観察、発達検査及び聞き取りなどを通して発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

電話予約 情報共有 日程調整 巡回訪問 (状況により継続相談)

特別支援センター： 664-1615 (直通)

